



まず三悪道を離れて人間に生ること大好きなよろこびなり。身はいやすしくとも畜生に劣らんや。家は心に思うことかなわらず。世の住み野喜こぶべし

こととばは、「正信偈」に「源信弘明一代教」とあることはです。源信様は平安時代に出られた天台宗のえらいお坊さんですが、「往生要集（おうじようようしゆう）」という本を書いて、いまの末法四世の凡夫である私たちが、ほとけになる道は、「お念佛に導かれてお淨土へ往生する以外にはないことを詳しく説き明かし、ご自分も比べて山の奥の横川（よがわ）というところにこもつてお念佛の生活をおくれた方です。その源信様が、「往生要集」のおいわれを、だれにでも納得できるように、かみくだいてお教え下さったのがこの「横川法語」です。

「三悪道」というのは、地獄・餓鬼・畜生の三つの生きかたです。それぞれ怒りと慾と無知によって支えられているくらしを言います。私と、全然関係のない世界ではないようにも思えます。もちろん私は人間です。畜生や餓鬼などではありません。たしかに私の生きている世界は人間であつても、私たちの日々のくらしま生きざまは、怒りや慾や無知に支えられた日ぐらしであるかもしれません。人間だといつても、地獄や餓鬼や畜生とどれだけの違いがあるのでしょうか。怒りや慾や無知に支えられた日々のくらしま生きはあります。しかしそれでも、地獄・餓鬼・畜生ではないことは、不思議なことであり希有な有難いことです。

私は、このようにあさましくらしをしながら

なぜ「人間」なのでしょうか。

「人間」というのを古いインドのことばでは、「マヌシャ」（manusha）といいます。そしてこのことばは「マナス」（manas）すなわち「考えること」という語からつくられていて、「考えすこと」「聞きわけ・聞き知ること」によつて三悪道だけではなく人間の世界をさえも超えて、「ただ一つ、三悪道とちがつてあるものは「考え」と無知とに支えられたらしくではあります。が、考えられると、三悪道（これを善導大師様は「細い一すじの白道といつておられます」）があるということです。

真如の世界から一すじの光明がさしてきます。はとけの因から南無阿弥陀仏とよぶ声が響いてまいります。

真如の光りを仰ぐそのなかで、光のなかに照し出された地獄や餓鬼や畜生となんのかわりもない浅間しい私の生きさまが見えてくるとともに、その私が、すでに、ほとけからよばれていた

いのちであつたと知らされていくのです。いやすくとも、まさしくとも、また心に思ふことかなわずとも、私は地獄ではない、餓鬼畜生ではない。なぜなら、私は如來から願われている身。

如來さまのましますことに気つかせていたゞく。

如來のいのちにつゝまれて生きる三悪道。人間のしあわせがそこにある「人間の生きがい」がそこにある。

「このゆえに人間に生まれたることを喜こぶべし」とよろこばれたのです。

森鷗外という先生は、お弟子がお年頭のごあいさつに来ると、「お前にくづになつた」と問います。弟子が「はい、三十になりました」と答えると、「三十になつてもそんな顔をしておるのか」としかりました。親からもつたままの顔であることははづかしいことです。三十になつた自分の顔がでなきなればなりません。「人間」の顔にならなければうそです。

明応二年の元日に、蓮如上人のところに年頭の挨拶に伺いました。その時の上人のおことば

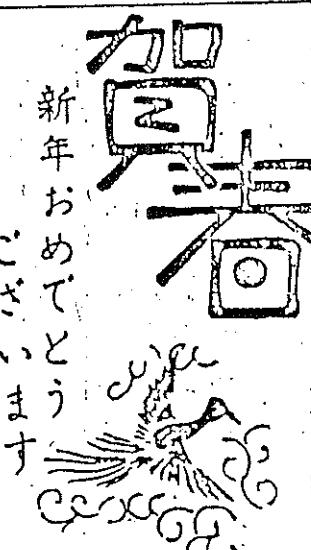


「道徳はいくつになるぞ。道徳、念仏申さるべし。」

「道徳よ、あなたいくつになられた。道徳よ、お念佛となえて。」

「道徳よ、あなたいくつになられた。道徳よ、お念佛となえて。」

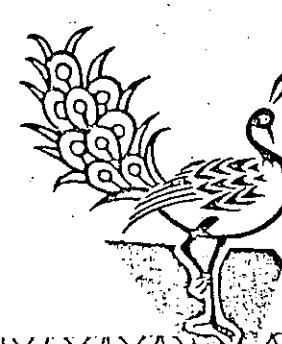
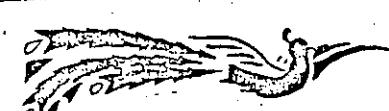
門徒総代  
勝林寺



新年おめでとうございます

仏教青年会

田生横岩斎田 坂永宮大谷平亀 龍田中永兼宮 西西西西西  
中田山上藤中 本井島石垣野井 井中島井 井島 池池池池池  
和静梅加初しげ代 滋勉 千正逸 幸保有貞 正清 卓秀 瞭哲  
子子乃子子の 稔孝 秋和雄 男夫隆雄 規三 馬子 子俊



葬儀のこと

## 一法名

生前にご本山で「帰敬式」(おかみそり)を受けているのが、浄土真宗の門徒としては普通なのですが、何かの事情で受けられなかつた方のために、住職がご門主様の代理として、葬儀に先だら「おかみそり」をし、「法名」をつけます。ですからこの「かみそりの式」は葬儀に入る一番はじめに行なつております。

「法名」と「戒名」とは違います。「戒名」というのは、お釈迦様のお弟子にして、いたくための条件として、先ず仏と法と僧とに帰依することを誓わねばなりません。これを三帰依(さんきえ)といいます。それから仏弟子とならぬた以上守らねばならない生活規律を自分で定めたり(戒といいます)お釈迦様などから決めてもらつたり(これを御します)します。これらのことときつり守りますとの誓いを保証するという意味でつけられる仏弟子としての名前が「戒名」です。ですから、そのような誓を立てて仏弟子となる天台宗や真言宗や禅宗などでは戒名といふことは使つています。(誓いを立てて戒名をいたゞいても、誓通り守れなかつたら、仏様をだましたことにはならないでしようか)

「法名」はそうではありません。誓おうとしても、全くそんなかいしよもないのが私です。たつた一日だって、誓つたことの守れたためしはあります。時々人かどの誓を立てるとはあります。それでもつて人をだましてやろうなどいふ下心がすぐに動いている自分に気づかせられます。私が何でもこの道を行くのだという強い「願い」と「誓いの実践」(これを行といふ)が欠けてはなりません。その「願」も「行」も欠けている私が、しかし「法名」をいたゞくのです。

「法」というのはインドのことばでダルマ。眞実のことです。如来さまのことです。眞実は、もちろん私には見えませんが、この虚偽な私の暮らしをもつゝみ取つています。如来は、如來であるがゆえに、この凡夫煩惱のなままで働きかけています。

どうしても真実の内におさめ取らねばおかないという真実の「願」と、いつでもどこでも呼びつけないではおれない「行」とで、すでに私が採取しているのです。

孝行とは、私が親のために誓を立て実践することではありません。私たちのするそのような親孝行は、親をべてんにかけたり、親にとつてはめいわくなものでしかありません。私の親孝行は、「こんな私のような子にでも、親は」と、すなおに親の願行のなかにいる私を喜ばしてもらうこと以外にはありますまい。

「法名」は、すでに如来の家にあることを喜ぶとき、つけられる名前です。ですから、真宗の徒であれば、生前に、ご本山にお参りした折に、「おかみそり」を受けます。が最近はお葬式の時には祭壇の最上段に掲げてあるようです。しかしこれも葬儀の間か忌明までの間置いて、あと

さて「法名」の、葬儀やその後のとりあつかいですが、浄土真宗では、本来「位牌」は用いないことになつています。が最近はお葬式の時には火葬場か墓に持つて行きます。

住職の書いたもの(料紙に法名・俗名・年齢・年月日などが書いてある)を、喪装して置くかまたは「過去帳」に写して保存するのが正しいとされています。

「法名」を聞いて、「おかみそり」を受けます。

(次回は「お通夜」)

悪人でない人の「善行」は平気で人のいのちをも奪う。みずからに悲しみをもたない

「愛」は

その子供をさえ犠牲にしてしまう

「愛」は

平気で人のいのちをも奪う。

みずからに悲しみをもたない

いかれるものに いかりかえさずして

いかれるものに いかりかえさずして  
いに悪しきを加うるもの。  
人は二つの勝利を得るのである。

いかれるものに いかりかえさずして  
いに悪しきを加うるもの。  
人は二つの勝利を得るのである。

十二月

一日 平田専福寺報恩講説教(二日)

二日 栗尾報恩講説教(二日)

三日 元総代・南繁藏氏の葬儀(片岡)

四日 西宗寺仏婦説教・唐川報恩講

五日 幕坂報恩講説教・唐川報恩講

六日 保谷・日殿報恩講

七日 奥小谷報恩講

八日 東里報恩講

九日 出合報恩講

十日 穂根報恩講

十一日 口小谷報恩講

十三日 勝林寺に男子出生(うちまご)

十四日

十五日

十六日

十七日

十八日

十九日

二十日

二十一日

二十二日

二十三日

二十四日

二十五日

二十六日

二十七日

二十八日

二十九日

三十日

三十一日

三十二日

三十三日

三十四日

三十五日

三十六日

三十七日

三十八日

## 今 年 の 行 事

四月

五月

六月

七月

八月

九月

十月

十一月

一二月

一月

二月

三月

四月

五月

六月

七月

八月

九月

十月

十一月

一二月

一月

二月

三月

四月

五月

六月

七月

八月

九月

十月

十一月

一二月

一月

二月

三月

四月

五月

六月

七月

八月

九月

十月

十一月

一二月

一月

二月

三月

四月

五月

六月

七月

八月

九月

十月

十一月

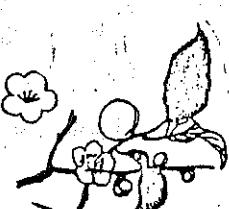
一二月

一月

いかれるものに いかりかえさずして  
いに悪しきを加うるもの。  
人は二つの勝利を得るのである。



よろしくお願い致します



「卓馬」と命名しました。

ほとけの子供として育ちますように